



ボタニカ 菩多尼訶

— 本草学から植物学へ —

展示解説パンフレット

菩多尼訶經

江戸宇田川榕菴榕譯

如是我聞。西方世界。有孔刺需斯。健斯涅律。私木里索肉。私刺愈斯。多兒涅福爾。篤歇兒。滿葛蕪法兒。拔烏非奴。私馬兒。吧及斯。花列。斯律兌弗。大學師蒲爾。花歇。大學師林。娜私。等諸大聖。累代出世。各於其國。發大願力。建大道場。設大法會。出大音聲。出真實言。說無有上。微妙甚深。最勝真理。教化諸大弟子。爾時大聖告諸大弟子言。四大洲中。百千萬億一切衆生。差別二種。人馬獅狗。鷄鳳燕雀。鯨蛇蠍龍。蜂龜蟹。性情智能。圓滿具足。不步行自在。名曰動物。性情智能。圓滿具足。有雄有雌。有一體兼男女。有六親眷屬。有壽量。有色相。不能步行。名曰植物。然此二種。本來一理。

我說如是最勝真理。若汝等不信受。我略說之。亞墨利加洲。有草號密莫沙。若有物觸。葉縮而萎。汝等若為異域遠物。猶作疑惑之念。使汝等現得是真理。開窻試見。庭前答末林。



さいたまけんりつもんじょかん
埼玉県立文書館
Saitama Prefectural Archives



埼玉県マスコット
コパトン&さいたまっちゃん



開催にあたって

私たちの身の回りには、たくさんの植物が存在しています。華やかな花や大輪の花、路地脇に生える“雑草”と呼ばれる草花、こうした植物に古来人々は関心を寄せ、調べ、名前を付けてきました。

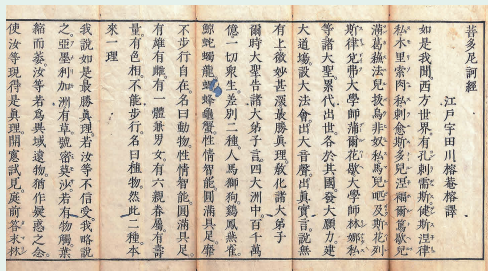
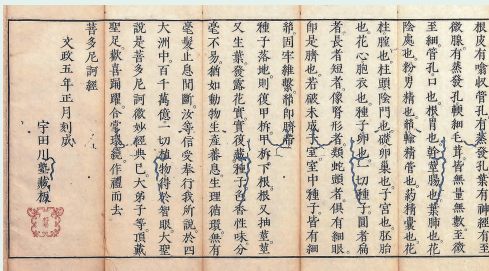
江戸時代、自然を対象とした研究は「本草学」と呼ばれ、その中から様々な学問が発展していきました。植物を研究する「植物学」も、本草学から派生した学問のひとつです。植物は薬や食物のような実用的な使われ方から、育て観賞して楽しむものとしても研究されてきました。文政5年(1822)、津山藩の藩医宇田川榕菴は、『菩多尼訶経(ぼたにかきょう)』を著し、西洋における植物学を日本に初めて紹介しました。ここから、日本に植物学が広まっていくことになります。

本企画展は、埼玉県立文書館が収蔵する資料の中から、我が国における植物学の祖とされる宇田川榕菴が著した『菩多尼訶経』や『植学啓原』といった典籍をはじめ、近世の本草学に関する資料や、近代植物学の成立に関する資料を展示し紹介するものです。人々が植物に対しどのような目を向けてきたのか、関心をもっていただく機会となれば幸いです。

令和5年6月6日 埼玉県立文書館長

第1章 植物学の誕生～宇田川榕菴の仕事～

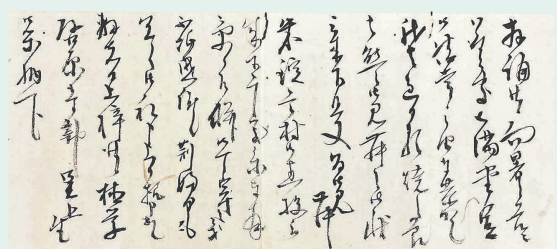
宇田川榕菴(1798～1846)は、シーボルトとも親交があった蘭学者です。宇田川家は美作国津山藩(現岡山県津山市)の藩医を勤めた家で、榕菴の養父玄真や、玄真の養父玄随も蘭方医として知られ、榕菴も藩医を勤めていました。本草学、特に植物に興味を深めた榕菴は、文政5年(1822)に西洋植物学の概要を紹介した『菩多尼訶経』を刊行します。さらに天保5年(1835)には、その具体的な内容を『植学啓原』として刊行し、近代植物学の礎を築きました。



宇田川榕菴著『菩多尼訶経』

文政5年(1822) 小室家文書4063

経文形式で西洋の植物学の概要が紹介されたものです。1000字余の漢字で、西洋における植物への考え方をもとに、植物と動物が共通性をもっていることを説いています。



宇田川榕菴著『植学啓原』

天保5年(1835) 小室家文書3954

西洋の植物学を日本で初めて体系的に示した書物です。スウェーデンの博物学者リンネ(1707～1778)の分類法に基づいた植物分類をはじめ、植物の器官や植物化学に関することなどが記されています。

榕菴はここで本草学と植物学が異なるものであることを論じていて、日本の近代植物学に大きな影響を与えました。

宇田川榕菴書状

天保5年(1835)6月10日 小室家文書1124-18

宇田川榕菴が比企郡番匠村(現ときがわ町)の医師小室元貞へ送った書状です。江戸で起きた大火事の際に元貞から受けた見舞いを謝するとともに、『植学啓原』を送ると記されています。元貞が榕菴から『植学啓原』をもらったことは、元貞の日記(『如達堂日記』小室家文書398)からもうかがえます。



第2章 植物へのまなざし～本草学のひろまり～

「本草学」とは、植物や動物など、自然界のなかから薬となるものを見いだす学問で、草木を主対象としたため、「本草」と称されました。こうした知識体系は、中国で発達し、古代に日本にも伝わりました。本草学の対象となる植物は、薬や食物の一つとしてとらえられていました。16世紀末に成立した『本草綱目』は、それら自然物を属性や生態に従って分類したもので、江戸時代に日本にも伝わり、植物の分類をはじめ、その後の本草学に大きな影響を与えました。また江戸時代には、植物は愛玩の対象ともなり、草木の生育を説いた書籍が刊行されるなど、園芸文化も発展しました。

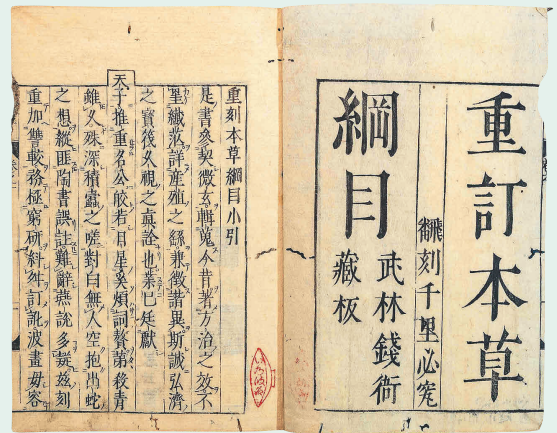


[紙本淡彩 神農図]

制作年代未詳 小室家文書5989

神農は、古代中国の伝説上の帝王で、農耕や医薬の創始者とされています。人々にとっての草木の薬効や毒の有無を調べるため、百草をなめてその良否を鑑定したとされています。日本では鎌倉時代以降、医療関係者の家で、医薬の神として神農像を崇拜する習慣が根付きました。

この神農図も、比企郡番匠村の医師小室家に伝わったものです。



『重訂本草綱目』（武林銭衙本）

制作年代未詳 猪鼻家文書2637

『本草綱目』は、中国の明代の医師李時珍が、1596年頃に刊行した本草書です。約1900種の品物を、自然物の種類によって分類配列し、薬品には解説を付したものです。

日本には、慶長12年（1607）に伝わり、徳川家康に献上されました。以後、日本の多くの本草学者がこの本を解読・研究していくことになりました。

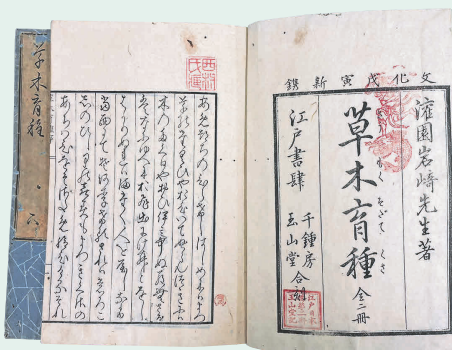
なお武林銭衙本は、1640年の改訂版です。



貝原益軒著『大和本草』

宝永6年（1709） 小室家文書3933～3942

儒者で博物学者の貝原益軒が、『本草綱目』を研究し、「大和」=日本における観察検証の結果をもとに著述した本草書です。薬用にとどまらない品目の選定や著述がされており、博物学的な書物でもあります。



岩崎灌園『草木育種』

文化15年（1818） 西角井家文書9683・9684

江戸時代には、朝顔や桜草の栽培が流行するなどの園芸文化が花開きました。本書は、本草学者の岩崎灌園が著した園芸書で、草木の手入れや接ぎ木の方法、それぞれの植物の栽培方法などが記されています。灌園は日本で最初の本格的な植物図鑑ともいえる『本草図譜』を刊行したことも有名です。



豊原国周「三十六花草の内」

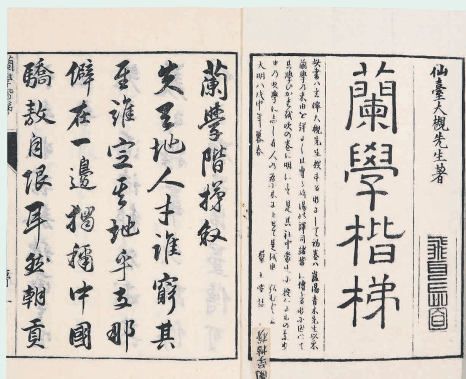
元治2年（1865） 小室家文書6370-4・5・6

豊原国周は、幕末から明治時代にかけての浮世絵師です。国周は役者絵を得意としていました。この連作も役者絵のシリーズですが、草花が主題となっており、役者の背景として草花が写実的に描かれています。掲載したのは左から「風車花（カザグルマ）」「葭芦（ヨシ）」「百合（ユリ）」です。



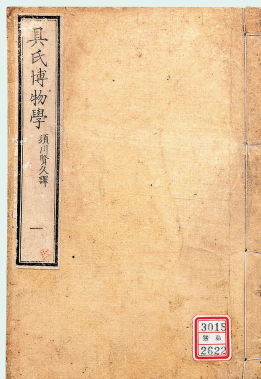
第3章 植物学の普及と教育

江戸時代後期以降、蘭学の広まりに伴い、西洋の学問が日本に紹介されていきました。植物学も宇田川榕菴をはじめ、岩崎灌園や小野蘭山、伊藤圭介ら本草学者によって研究されていきます。明治時代になると、本格的な西洋学問が広まる中、明治10年（1877）に設立の東京大学に生物学科が開設されて、植物学の講義が行われ、近代植物学が発展し、普及していくことになりました。その後、全国的な理科教育のなかで植物学がとりいれられたほか、数多くの植物図鑑が刊行されました。



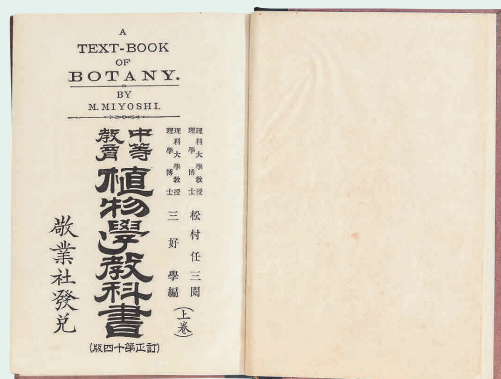
大槻玄沢著『蘭学階梯』
天明8年(1788) 小室家文書4100

日本で最初の蘭学入門書です。当時の最先端の学問であった蘭学を学ぶ人は多く、本書のような蘭学の入門書が求められました。蘭学の中心は医学で、当時の医者必修科目でした。18世紀の日本の医者で、蘭学者としても著名だった一人が宇田川玄隨（榕菴の養祖父）でした。



田中芳男校閲『具氏博物学』
明治9年(1876) 猪鼻家文書2622

明治期には、様々な西洋の学問が導入されていきます。本書は西洋博物学の翻訳書です。「具氏」とはアメリカの作家グードリッチのことで、本書は明治10年代の小学校において、自然科学の教科書として用いられていました。



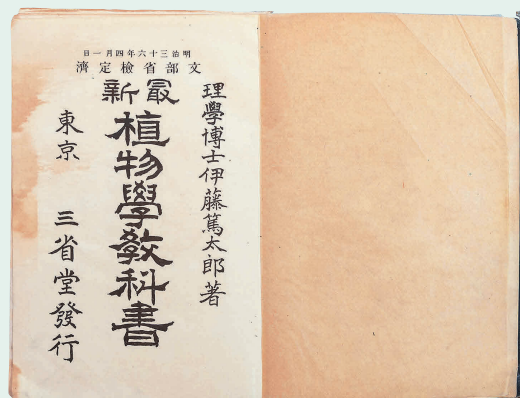
三好学著『中等教育植物学教科書』
明治23年(1890) 飯塚家文書5780

明治期に師範学校や中学校などの中等教育向けに出された植物学の教科書です。著者の三好学は、近代の植物学者で帝国大学の教授として、植物学研究を牽引しました。本書は植物の基礎から、調べ方、標本の作り方に至るまでが論じられています。



田中芳男・小野職愨撰『有用植物図説』
明治24年(1891) 図書A470ユ

幕末・明治初期の博物学者である田中芳男と小野職愨によって編さんされた、彩色和装本の植物図鑑です。近代日本の殖産興業を目的とし、10年以上の歳月をかけて作成されました。田中・小野はともに、明治初期に文部省博物館に勤務し、田中は東京国立博物館設立に携わったことでも知られ、小野は江戸時代を代表する蘭学者小野蘭山の曾孫で近代植物学の普及に尽力しました。



伊藤篤太郎著『最新植物学教科書』
明治38年(1905) 大熊(正)家文書5787

明治38年に刊行された植物学の教科書です。著者の伊藤篤太郎は、幕末・明治期の植物学者伊藤圭介の孫で、自身も植物学を学び、初めて植物に学名をつけた日本人としても知られています。本書には、植物の構造や種類、分布などが詳細に著述されています。

埼玉県立文書館 令和5年度企画展
「善多尼訶(ボタニカ)-本草学から植物学へ-」展示図録
編集・発行 埼玉県立文書館 さいたま市浦和区高砂4-3-18
発行日 令和5年6月6日
執筆 駒見敬祐(県立文書館 学芸員)
印刷 (有)東京工芸社